

令和 8 年 1 月 2 1 日

令和 7 年度 京都文化芸術都市創生審議会 主査制度レポート

京都文化芸術都市創生審議会
主査 太下義之、坂本公成、建島哲

I 調査概要

1 調査目的

当審議会では、個々の文化施策についてより深く審議を行うために、令和 6 年度に主査制度を導入。京都市が行う事業から一つを選定して調査を行い、論点・課題を整理するとともに、今後の方向性を提言することを目的とする。

2 調査対象事業

京都市芸術文化特別奨励制度（以下、「当該制度」とする。）

3 調査日時等

令和 7 年 7 月 4 日（金）午前 10 時～正午

於：京都市役所分庁舎地下 1 階（文化市民局第 1 会議室）

4 調査方法

京都市へのヒアリング

II 調査結果

1 調査対象事業の概要

(1) 沿革・概要

当該制度は、京都市が新たな芸術文化の創造を促進し、京都の芸術文化の振興を図ることを目的に、将来、特に有望と認められる若い芸術家を奨励する制度である。

京都市芸術文化振興計画（平成 8 年度策定）に基づき、京都芸術センターの開設とともに平成 12 年度に創設。当時は、若手芸術家の支援の大きな両輪であり、重要事業として開始された。

現在では、京都文化芸術都市創生条例第 12 条（新たな文化芸術の創造に資するための施策）、京都文化芸術都市創生計画の施策 66（京都芸術センター等による芸術家の育成・活動支援）に基づく事業とされており、今なお、重要施策の一つとして位置付けられている。

将来に向けて積極的な芸術活動を行うための奨励金として、申請者の中から審査のうえ、1 個人又は 1 グループにつき、300 万円を交付する。年齢制限はないが、主に 20 代から 30 代半ばの年齢層からの応募が期待されている。芸術のジャンルは問わず、また、300 万円の使途について、領収書等の信憑書類の提出等は求めない。

なお、京都市芸術新人賞と類似的に捉えられることもあるが、同賞は「文化芸術の分野における功

績がある新人で、将来において更なる功績を挙げることが期待される者」を顕彰する制度である一方、当該制度は功績がなくても今後の飛躍が期待できる者の活動を支援するための奨励金を交付する制度である点で異なる。

(2) 審査の詳細

ア 審査の観点

審査にあたっては、「今ある力」よりも「今後の飛躍の可能性」に注目するとされている。1次審査は近年取り組んでいる活動に係る資料によって専門分野における独創性や先駆性、活動計画の実施の意義や実現可能性を評価する。2次審査では、パフォーマンスや質疑応答により今後の飛躍の可能性を評価する。

イ 審査の手法

1次審査は音楽、造形、舞台の3部門の専門委員会に分かれ、各3～4名の委員によって書類審査が行われる。

各部門から概ね2名ずつが2次審査に進み、プレゼンテーション審査を受ける。2次審査の審査員は10名で、パフォーマンスの実演や作品展示を実見したうえで、面接を行う。

1次審査、2次審査の結果は全ての申請者に通知される。

表1 令和7年度京都市芸術文化特別奨励制度審査委員会委員名簿(2次審査) ※役職は当時のもの

氏名	役職等
赤松 玉女	京都市立芸術大学 学長
小崎 哲哉	文筆家、アートプロデューサー
亀岡 典子	産経新聞大阪本社編集局文化部 特別客員記者
小谷 眞由美	株式会社ユーシン精機 名誉会長
高島 整子	音楽プロデューサー、ライター
建島 哲【審査委員長】	京都芸術センター 館長
福本 潮子	美術家
松下 悦子	同志社女子大学学芸学部音楽学科 教授
森山 直人	多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科 教授
山本 ひとみ	京都市文化市民局長 (京都市文化芸術政策監 兼職)

(3) 近年の応募・選定の状況

ア 申請者数・選定数・選定分野

奨励年度	申請者数 (件)	選定数 (件)	選定分野
令和7年度	43	1	舞台
令和6年度	64	1	音楽
令和5年度	47	1	造形
令和4年度	55	1	舞台
令和3年度	中止		
令和2年度	48	2	造形、舞台
令和元年度	62	2	音楽、舞台

※ 令和3年度は募集中止

※ 平均で53件程の申請があり、非常に狭き門となっている。

イ 分野別の申請者数 (単位: 件)

奨励年度	音楽	造形	舞台	その他	合計
令和7年度	13	23	15	-	51
令和6年度	22	37	16	-	75
令和5年度	15	25	13	-	53
令和4年度	18	29	12	3	62
令和3年度	中止				
令和2年度	10	24	15	2	51
令和元年度	18	33	18	5	74

※ 分野が重複している申請があるため、合計数はアの申請者数と一致しない。

(4) これまでの奨励者

制度創設から令和7年度奨励者までで、合計47組を奨励している。詳細は巻末の表3のとおり。

(5) 奨励者のその後の活躍

奨励者は、奨励後5年間、活動を報告するものとされている。

必ずしも京都に拠点を置き続けている者ばかりではないが、精力的に公演や展覧会等の実施を通じて活躍の場を広げている者たちが多い。中にはその後に京都市芸術新人賞をはじめとする賞を受賞している者も少なくない。

表2 奨励者のその後の展開（抜粋） ※詳細は巻末の表4のとおり。

奨励年度	氏名	主な受賞歴
令和2年度 (2020年)	西條 茜	2022 京都市芸術新人賞 MIMOCA EYE 賞
平成29年度 (2017年)	木ノ下 裕一	2023 和歌山県文化奨励賞 2020 京都市芸術新人賞 2018 京都府文化賞 奨励賞
平成27年度 (2015年)	久門 剛史	2018 メルセデス・ベンツ・アート・スコープ 2018-2020 2017 京都市芸術新人賞 2016 VOCA 展 VOCA 賞 文化庁東アジア文化交流使
平成18年度 (2006年)	宮永 愛子	2019 芸術選奨新人賞 2013 京都市芸術新人賞 2011 五島記念文化賞 美術新人賞 2009 京都府文化賞奨励賞
平成17年度 (2005年)	名和 晃平	2019 京都美術文化賞 2018 Pen クリエイター・アワード 2017 京都府文化賞 功労賞 2011 京都市芸術新人賞
平成13年度 (2001年)	文楽若手義太夫節の 会（2名） 竹本 千歳大夫 豊竹 呂勢大夫	<竹本 千歳大夫> 2024 紫綬褒章 2022 芸術選奨 文部科学大臣賞 2009 文化庁文化交流使 <豊竹 呂勢大夫> 2024 松尾芸能賞 優秀賞 2019 芸術選奨 文部科学大臣賞 2013 日本伝統文化振興財団賞

2 調査対象事業の評価

(1) 総論

当該制度は、新たな文化芸術の創造を推進するための、京都市の主要事業の一つである。

京都市においては、若手芸術家の支援に係る事業として、京都芸術センターにおける制作支援事業、「東山 アーティスツ・プレイスメント・サービス」や「ロームシアター京都×京都芸術センター U35 創造支援プログラム」など、幅広く展開されているが、その中であっても、少数の芸術家に直接多額の奨励金を交付する点で、まさに“頂点の伸長”を目指すものである。他の政令市には類例が見られず、京都市のフラッグシップ的な事業の一つであると考えられる。

これまで奨励者として選定された47組の多くは、現在も活発に活躍している。全国、海外で活躍される方も多く、当該制度は、文化芸術振興に係る制度として総じて非常に効果が高いと評価でき

る。また、奨励者からは「京都市の特別奨励者になっているという実績が、他の助成金を獲得する際の審査でも有効に働いたのではないか」という指摘もなされている。

しかし、令和4年度以降、選定枠が1枠となっており、これは大きな課題である。多様な文化芸術分野を総合的に支援することを難しくしているほか、申請者の意欲を削ぐ要因とも考えられる。

さらに、本制度についてより充実し公平性のあるものとするためには、審査員の選定方法や奨励者選定後の支援等について、工夫の余地もあると思われるため、今後検討されたい。

(2) 論点・課題

ア 募集

申請件数は年度によってばらつきがあるものの、緩やかな減少傾向にある。選定枠数が1枠しかないことも応募のハードルを高めていると考えられる。

現在、自身での申請のみを受け付けており、推薦制を採用していない。他の賞などでは推薦制による場合も多く、こうした仕組みを併用することで申請件数を確保することも考えられる。

さらに、募集案内等では、「審査にあたっては「今ある力」よりも「今後の飛躍の可能性」に注目します。」と明記されている。しかし実際には、活動の独創性や先駆性も十分に評価しているため、記載内容と齟齬がある状況である。

イ 審査

現在、審査員は、1次審査では各分野（音楽、造形、舞台）の主に40代～50代の専門家が、2次審査では多様なジャンルの審査に対応できるよう主に50代～70代の専門家が登用されている。これは、1次審査では各分野における専門的な判断が、2次審査では高度な知見を持った総合的な判断が必要となるためである。

これに対して、過去の奨励者からは、「若いアーティストを2次審査の審査員に加えるべき」、「フィードバックを得る機会が欲しい」などの意見が聞かれている。

ウ 選定

制度開始当初の平成13年度奨励者は5組選出されていたが、その後、選定枠は減少し、平成17年度から令和2年度は2組であった。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、令和3年度奨励者の募集は中止となり、令和4年度奨励者以降は、「行財政改革計画」の影響もあって、選定は1組となっている。

申請者は1次審査においては3部門に大別されているが、一つの分野に限っても、申請されるジャンルは非常に多岐にわたる。例えば「舞台」の専門委員会では、演劇、舞台照明、日本舞踊、バレエ、コンテンポラリーダンス等、さらに細分化される。それぞれのジャンルについて固有の芸術性やコミュニティが存在し、専門性が異なっている。選定枠数が1枠しかない状況では、これら多種多様な文化芸術分野を支援し、その振興や伸長に寄与することは難しいと言わざるを得ない。

また、選定される分野は令和4年度から7年度で、「舞台」→「造形」→「音楽」→「舞台」と順番になっており、選定枠数が1枠であることで、連続して同じ分野は選ばれないという予断や慣

例が生じかねない状況である。

エ 奨励内容

(ア) 奨励金の額

現在の1件当たりの奨励金額は300万円である。

過去の奨励者の300万円の使途として、海外への留学、公演、視察、国内での展覧会や公演の実施などが挙げられる。

(イ) 奨励者への伴走支援

現状としては、奨励者から問合せがあった際に情報提供を行うにとどまっており、積極的な展示・公演機会の提供等は行われていない。奨励者選定後の展示や公演などは必須とされていないが、過去の奨励者からは、機会の提供を求める声も上がっている。

(3) 今後の方向性

ア 募集

推薦制を採用した場合、現時点で既に実力があり、質の高い奨励者が選ばれることになる。しかしながら、当該制度は、申請者自身による今後の事業計画やパフォーマンスを通じて、挑戦する姿勢や将来の飛躍に審査の重点を置くものであることから、引き続き公募制を採用することでより多くの可能性ある人材の発掘につながっていくものと考えられる。

ただし、実際の審査において、これまでの活動歴（今ある力）を全く加味せずに将来の飛躍の可能性を測ることは現実的ではないことから「今ある力」とともに「今後の飛躍の可能性」に注目して審査を行う。」などとして、来年度以降、記載を改められたい。

イ 審査

それぞれ専門分野を持つ審査員を登用する以上、審査員を選んだ時点で、受賞者の傾向が予測されるということが、多くの賞において発生している。当該制度は多様なジャンルにおける奨励者を選考することから、審査員の選定には一層の配慮が必要であり、総合的な視点で申請者の将来性を判断できる審査員の登用が必須である。

過去の奨励者からは、若いアーティストを審査員に登用するようという意見が上がっている。1次審査の審査員については、現状、過去の奨励者など40代～50代の若いアーティスト等を登用しているため、引き続き、積極的に登用されたい。2次審査については、自身も発展途上にある若いアーティストが審査員として総合的かつ客観的な審査を行うことは容易ではなく、経験を積んだ人材が審査を担うのが適当である。2次審査の審査員は、今後とも肩書ではなく、広い視野を持って高い知見により審査ができる者を採用するよう留意されたい。

ウ 選定

選定枠数について、専門委員会（1次審査）は3部門に分けて行われているが、実際にはより細分化された文化芸術分野からの多様な申請がある以上、1枠では甚だ不足しており、京都の文化の頂点を伸長するという政策目的を達成し難いと言わざるを得ない。また、選定が1枠に限られるこ

とは、全体の申請者数や新規の申請が減少し若い世代の芸術家が当該制度から遠のく遠因ともなるだろう。

理想的には、毎年、各審査分野から1人を選定できるように3枠が必要であるが、少なくとも2枠を確保し、細分化する文化芸術分野を総合的に支援するとともに、才能ある芸術家を適切な時期に支援することが望ましい。

エ 奨励内容

(ア) 奨励金の額

奨励金額については、1件あたり300万円から減額することは望ましくない。この間の物価高を踏まえても、この額は1年間の創造への専念を可能にするものであり、金額を減額した場合、制度の価値そのものが低下してしまう。

過去の奨励者は、奨励金について海外留学や公演の実施などに使っている。例えば舞台芸術で国内公演を行う場合、1公演あたり300万円以上の支出となることが多い。奨励金としてこれら経費の掛かる取組の財源を確保できることは、奨励者たちに挑戦の機会を与えることに直結し、その後の活動や評価に繋がっていると見える。

制度創設当初からの物価スライドや為替相場の変動を鑑みれば、増額して然るべきであるが、1件当たりの交付金額を増加させることは市予算編成上、容易でないことも察せられる。そのため、企業メセナとの連携なども含めつつ、1件当たりの交付金額については少なくとも現状額を維持、将来的には現状額以上の確保に向けて努力されたい。

(イ) 奨励者への伴走支援

展示や公演を必須とすることは、奨励金を得ての奨励者の活動を制限することとなる。また、奨励者によって行政から得たい支援の形は異なる。こうした事情も踏まえ、例えば申請書に今後の事業計画に加え、京都市から受けたい支援内容について記入する欄を設けることが考えられる。その他、現状に引き続き、奨励者から発表機会やそのほかの事柄についての相談があった時は、京都芸術センターの各種支援制度をはじめ、コーディネーターやディレクターとのマッチングなど積極的な情報提供をするよう努められたい。

3 参考資料

表3 これまでの奨励者（計47組）

年度	奨励者名	分野
令和7年度	竹本 碩太夫	文楽
令和6年度	中川 裕貴	音楽（チェロ）
令和5年度	黒川 岳	現代美術
令和4年度	ゴード企画（2名）	舞踊・パフォーミングアート
令和2年度	西條 茜	陶芸、現代美術
	tuQmo（2名）	コンテンポラリー・サーカス
令和元年度	空間現代（3名）	現代音楽
	村松 稔之	声楽、カウンターテナー
平成30年度	久保 ガエタン	現代美術
	hyslom（3名）	現代美術、パフォーマンス
平成29年度	木ノ下 裕一	演劇・古典芸能の研究
	高尾 長良	小説
平成28年度	谷中 佑輔	現代美術・彫刻
	林 美音子	地歌演奏・柳川三味線
平成27年度	徳山 拓一	現代美術を中心としたキュレーション
	久門 剛史	現代美術
平成26年度	中川 日出鷹	現代音楽・ファゴット
	森田 玲・林 宗一郎	民俗芸能・能楽
平成25年度	小林 達夫	映画
	JCMR KYOTO（3名）	現代音楽の研究・企画
平成24年度	中嶋 俊晴	カウンターテナー・声楽
	Hyon Gyon	絵画
平成23年度	加藤 文枝	クラシック・チェロ
	宮永 亮	映像表現
平成22年度	あごうさとし	劇作・舞台演出
	曾根 知	コンテンポラリーダンス・バレエ
平成21年度	筒井 加寿子	演劇
	内藤 裕子	ピアノ
平成20年度	三浦 基	舞台演出
	横山 佳世子	邦楽
平成19年度	英 裕	洋画

平成 18 年度	高谷 公子	声楽
	宮永 愛子	現代美術
平成 17 年度	名和 晃平	現代美術
	吉本 有輝子	舞台照明デザイン
平成 16 年度	砂連尾 理+寺田 みさこ (2名)	現代舞踊
平成 15 年度	内田 淳子	演劇
	上森 祥平	クラシック・チェロ
	Mitch	ジャズ・トランペット
平成 14 年度	井上 隆平	クラシック・ヴァイオリン
	ソバット・シアター (10名)	映像・美術造形
	高橋 匡太	現代美術・インスタレーション
平成 13 年度	松岡 万希	クラシック・声楽
	河原崎 貴光	メディアアート
	奥村 泰彦	舞台美術
	坂本 公成	現代舞踊
	文楽若手義太夫節の会 (2名)	浄瑠璃

(表4) 奨励者のその後の展開

奨励者一覧			受賞歴	備考
年度	奨励者名	分野		
R7 (2025)	竹本 碩太夫	文楽	奨励から間がないため、調査対象としない	調査対象としない
R6 (2024)	中川 裕貴	チェロ	奨励から間がないため、調査対象としない	調査対象としない
R5 (2023)	黒川 岳	現代美術	2024 京都芸術センター「AIRプログラム エクスチェンジ」により、ノルウェーに滞在	<近年の主な展覧会> 2025 個展「風団扇」「路上水琴窟」「野性の編み物」(sharpardstrong、名古屋) 2024 「バグスクール:野生の都市」(アートセンターBUG、東京)
R4 (2022)	ゴード企画(2名) 合田有紀、野村香子	舞踊・パフォーマンスアート	N.A.	<近年の主な活動> 2023 「シモーヌ深雪 / D・K・ウラジ CONTEMPORARY DANCE WORKSHOP」主催 <野村 香子> 2023 文化庁「なんでもOKなダンスパフォーマンス」(ロームシアター京都) 出演 「京都国際ダンスワークショップフェスティバル」プログラム・ディレクター(2022~2024)
R3 (2021)	募集中止			
R2 (2020)	西條 茜	陶芸、現代美術	2022 京都市芸術新人賞 MIMOCA EYE 大賞	<近年の主な展覧会> 2025 「国際芸術祭あいち」(愛知県陶磁美術館) 個展「西條茜展 ダブル・タッチ」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館) 2024 「石川順恵、西條茜」(Blum、東京) 2024 大阪グランフロントに《Rebecca》を常設 2023 「ホリデー・パフォーマンス 西條茜」(ロームシアター京都)
	tuQmo(2名) 池田 精堂、菅沼 江里花	コンテンポラリー・サーカス	N.A.	<池田 精堂> 2025 京都市立芸術大学「TOPOS:まなびあう庭としての芸術大学」ゲスト講師 2024 「Floating and Flowing」展(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA) 会場構成
31 (2019)	空間現代(3名) 野口 順哉、古谷野 慶輔、山田 英晶	現代音楽	N.A.	<近年の主な公演> 2022 空間現代×三重野龍「汽」(ロームシアター京都) <近年の主な作品> 2023 アルバム『Tracks』 2021 アルバム『Tentei』 ※ 継続して、ライブハウス「外」を運営

31 (2019)	村松 稔之	声楽、カウンターテナー	N.A.	<近年の主な公演> 2025 リサイタル「じしゅコン」(東京文化会館) 2024 オペラ「Julie et Mao」出演(エアフルト歌劇場、ドイツ) 2022 オペラ「ジュリオ・チェーザレ」のニレーノ役でオペラデビュー(新国立劇場)
30 (2018)	久保 ガエタン	現代美術	2021 TERRADA ART AWARD 真鍋大度賞 2020 世田谷区芸術アワード“飛翔”	多摩美術大学 講師 <近年の主な展覧会> 2024 「丸の内Drippin' Tripper」(YAU CENTER ほか) 2021 「天の虫」(世田谷美術館) 2020 「MOTアニュアル 透明な力たち」(東京都現代美術館) 「KYOTO STEAM」(京都市京セラ美術館)
	hyslom(3名) 加藤 至、星野 文紀、吉田 祐	現代美術、パフォーマンス	N.A.	2023 大麻栽培の疑いでメンバーの吉田祐と星野文紀が逮捕 2021 休館中の広島現代美術館でプロジェクト「現場サテライト」を実施
29 (2017)	木ノ下 裕一	演劇・古典芸能の研究	2023 和歌山県文化奨励賞 2020 京都市芸術新人賞 2018 京都府文化賞 奨励賞 2015 文化庁芸術祭 新人賞	まつもと市民芸術館 芸術監督団団長(2024~) 2024 『物語の生まれる場所へ 歌舞伎の源流を旅する』刊行 <近年の主な公演> 2024 『三人吉三郎初買』(演出:杉原邦生)(東京芸術劇場プレイハウスほか) 2023 『桜姫東文章』(演出:糸井幸之介)(ロームシアター京都ほか)
	高尾 長良	小説	2019 「音に聞く」で芥川賞候補	<近年の作品> 2022 エッセイ「レメシェフの憂いーロシアへの旅の記憶に寄せて」 2020 小説「カレオールの汀」
28 (2016)	谷中 佑輔	現代美術・彫刻	2019 文化庁在外研修員としてアムステルダムとベルリンに滞在(~2022) 2016 ポーラ美術振興財団在外研修員としてベルリンに滞在(以降、ベルリン在住)	<近年の主な展覧会> 2024 個展「谷中佑輔 吊いの選択」(十和田市現代美術館) 個展「谷中佑輔」(大阪中之島美術館) 2022 「DOMANI・明日展2022-23年」(国立新美術館) 2019 「セレブレーション」(京都芸術センター)
	林 美音子	地歌演奏・柳川三味線	2021 京都市芸術新人賞	<近年の主な公演> 2024 第49回地歌・箏曲演奏会(府立府民ホールALTI) 2021 柳川三味線 和紙胴「響」お披露目会(京都芸術センター)
27 (2015)	徳山 拓一	現代美術を中心としたキュレーション	N.A.	東北芸術工科大学 客員教授(2020~) 森美術館 アソシエイトキュレーター(2016~) <近年の主な担当展> 2024 「シアスター・ゲイツ:アフロ民藝」 2022 「地球がまわる音を聴く:パンデミック以降のウェルビーイング」 2018 「六本木クロッシング2019展:つないでみる」 「MAMプロジェクト:アビチャップン・ウィーラセタクン+久門剛史」

27 (2015)	久門 剛史	現代美術	2018 メルセデス・ベンツ アート・スコープ2018-2020 2017 京都市芸術新人賞 2016 VOCA展 VOCA賞 文化庁「東アジア文化交流使」により、上海に滞在 2015 日産アートアワード オーディエンス賞	<近年の主な展覧会> 2023 個展「Dear Future Person,」(京都市立芸術大学ギャラリー@KCJA) 個展「Tsuyoshi Hisakado: Polite Existence」(ジャミール・アーツ・センター、ドバイ) 2020 個展「らせんの練習」(豊田市美術館) 2019 「Venice Biennale」 2017 「アジア回廊 現代美術展」(二条城) 2019 KYOTO EXPERIMENT 「らせんの練習」(ロームシアター京都)
26 (2014)	中川 日出鷹	現代音楽・ファゴット	N.A.	東京音楽大学 非常勤講師 日本フィルハーモニー 楽団員 <近年の主な公演> 2024 「中川日出鷹ファゴットリサイタル」(青山音楽記念館)
	森田 玲・林 宗一郎	民俗芸能・能楽	N.A.	<森田 玲> 2025 季刊民族学「地車(だんじり)の美と熱狂一祭を彩る神賑(かみにぎわい)」 2024 明石市立文化博物館「企画展 明石の布団太鼓Ⅱー彫刻と刺繍に見る匠の技」(共編著) <林 宗一郎> 2025 十四世喜右衛門を襲名 2020 重要無形文化財総合認定 2017 マレーシア国交樹立60周年記念公演にて「船弁慶」上演
25 (2013)	小林 達夫	映画	2015 京都市芸術新人賞	2023 短編『米国音楽』監督 行定勲監督『リボルバー・リリー』脚本 2022 松永大司監督『Pure Japanese』脚本 2020 二宮健監督『とんかつDJアゲ太郎』監督補
	JCMR KYOTO(3名) 清水 慶彦、竹内 直、増田 真結	現代音楽の研究・企画	N.A.	清水は、大分大学 准教授(2015～) 竹内は、龍谷大学 非常勤講師(2023～)、同志社女子大学 嘱託講師(2021～)、京都市立芸術大学 非常勤講師(2020～) など 増田は、京都教育大学 准教授(2021～) <増田 真結> 【論文】 2021 「琴歌譜の解説—平安初期大歌の旋律と和琴奏法」ほか(日本伝統音楽研究センター『雅楽のイロイロを科学する本』) 【近年の作品】 2025 《月に詠む歌》箏歌とチェロのための(Duo Yumeno 委嘱) 【演劇のための音楽】 2025 サファリ・P 第11回公演『悪童日記』(脚本・演出:山口茜)

24 (2012)	中嶋 俊晴	カウンターテナー・声楽	2024 青山賞 2022 文化庁芸術祭賞 新人賞 2020 五島記念文化賞オペラ新人賞、東急財団新人賞 2018 文化庁新進芸術家在外研修	<近年の主な公演> 2025 「リクライニング・コンサート」(Hakuju Hall) 2024 「中嶋俊晴 カウンターテナーリサイタル」(青山音楽記念館) 他、多くのコンサートに出演
	Hyon Gyon	絵画	2013 京都市芸術新人賞	2017 「アジア回廊 現代美術展」(京都芸術センター) 2016 「Art for Art's Sake」(カーネギー美術館、カリフォルニア) 「Emotional Drought」(Shin Gallery、ニューヨーク) NYに移住し、Si On として活動
23 (2011)	加藤 文枝	クラシック・チェロ	N.A.	2024 「加藤文枝 無伴奏チェロリサイタル」(横浜市栄区民文化センター) 2014 地域創造 公共ホール音楽活性化事業 登録アーティスト (~2015)
	宮永 亮	映像表現	N.A.	2025 個展「ハコガマエ HAKO-GA-MAE」(kumagusuku SAS) 2020 個展「KAA10」(KAAT神奈川芸術劇場) 2017 「『彼方へ』 國府理・林勇気・宮永亮」(静岡市美術館) 2016 「REALTIME」(ビクトリア国立美術館、オーストラリア) 京都精華大学 准教授
22 (2010)	あごうさとし	劇作・舞台演出	2023 KYOTO NEXT AWARD 優秀賞 [アーツシード京都] 2021 佐治敬三賞 文化庁芸術祭賞 大賞 2020 第39回京都府文化賞 奨励賞 2017 京都市芸術新人賞	THEATRE E9 KYOTO芸術監督(2019~) 一般社団法人アーツシード京都設立、代表理事(2017~)
	曾根 知	コンテンポラリーダンス・バレエ	2020 メキシコ国際ダンスフェスティバル・ソロダンスコンペティション ファイナリスト	2024 アメリカ・ベントン大学にて M.F.A. (ダンス) を取得 2021 「No Man's Land」(ロームシアター京都 ノースホール) 2014 「Las Meninas」(京都芸術センター) ※ 産婦人科医としてクリニックに勤務
21 (2009)	筒井 加寿子	演劇	2024 関西えんげき大賞 優秀作品賞 2020 十三夜会 奨励賞	演劇ユニット「ルドルフ」代表 京都舞台芸術協会 理事(2020~)
	内藤 裕子	ピアノ	2010 姫路市芸術文化奨励賞	内藤裕子おんがく教室を主宰 2019 神戸フィルハーモニックとピアノコンチエルトを共演 2017 文化庁/日本演奏連盟主催「新進演奏家育成プロジェクト」に選抜され、いずみホールにてソロリサイタル
20 (2008)	三浦 基	舞台演出	2017 読売演劇大賞 選考委員特別賞 2012 京都市芸術新人賞 2011 京都府文化賞 奨励賞	「地点」代表 2012 ロンドン・グローブ座の招聘により、『コリオレイナス』を演出
	横山 佳世子	邦楽	2012 京都市芸術新人賞 文化庁芸術祭音楽部門 芸術祭賞優秀賞 2008 文化庁芸術祭音楽部門 芸術祭賞新人賞	「横山佳世子の邦楽サロン」(茨木市市民総合センター)を継続開催(2025年3月時点で32回に上る。)

19 (2007)	英 裕	洋画	2025 岡本太郎現代美術賞展 入賞 2010 京都市芸術新人賞	2009 ポーラ美術振興財団在外研修員としてバンコクにて研修 <近年の主な展覧会> 2025 個展「景色かる」(toyono gallery vitokuras) 2023 個展「作りだす庭」(なら歴史芸術文化村) 2022 「未景」(御寺泉涌寺) ※ 2年に1度のペースで個展を開催
18 (2006)	高谷 公子	声楽	N.A.	<近年の公演> 2025 アンサンブルつるみ合唱団「定期演奏会」(鶴見区民センター) 2024 パシフィックフィルハーモニア東京 ウクライナ支援コンサート「Ukrainian Music for Peace」(東京オペラシティ)
	宮永 愛子	現代美術	2019 芸術選奨 新人賞 2013 京都市芸術新人賞 2011 五島記念文化賞 美術新人賞 2009 京都府文化賞 奨励賞 2007 文化庁新進芸術家在外研修	<近年の主な展覧会> 2025 「1900 - 2025 : souffle de lumière」(ル・クレジオギャラリー、パリ) 2023 「宮永愛子 詩を包む」(富山市ガラス美術館) 「宮永愛子展」(イムラアートギャラリー) 「宮永愛子-海をよむ」(ZENBI-鍵善良房-KAGIZEN ART MUSEUM) 2022 「くぼみに眠る海」(ミヅマアートギャラリー、東京) 2020 京都府新鋭選抜展2020特別出品「うたかたのかさね」(京都文化博物館 別館ホール)
17 (2005)	名和 晃平	現代美術	2019 京都美術文化賞 2018 Pen クリエイター・アワード 2017 京都府文化賞 功労賞 2011 京都市芸術新人賞 2010 アジアン・アート・ビエンナーレ・バンガラデシュ 最優秀賞	瓜生山京都芸術大学 教授 <近年の主な展覧会> 2024 「日本現代美術私観:高橋龍太郎コレクション」(東京都現代美術館) 「アブソリュート・チェアーズ」(愛知県美術館、埼玉県近代美術館) 2023 個展「Cosmic Sensibility」(Pace Gallery、ソウル) 2022 個展「Decode」(Arario Galley Shanghai) 個展「生成する表皮」(十和田市現代美術館)
	吉本 有輝子	舞台照明デザイン	2017 日本照明家協会賞 舞台部門大賞(文部化学大臣賞)	武蔵野芸術大学 客員教授 2006 文化庁新進芸術家海外留学制度により、パリ市立劇場で研修(～2007) <近年の参加作品> 2024 坂本龍一+高谷史郎『TIME』 2023 KYOTO EXPERIMENT チェルフィッチュ『宇宙船イン・ピトウイン号の窓』

16 (2004)	砂連尾理+寺田みさこ(2名)	現代舞踊	<p><砂連尾 理> 2008 文化庁在外研修員として、ドイツ・ベルリンに1年滞在</p>	<p>2名でのダンスユニットは2007年まで</p> <p><砂連尾 理> 立教大学 教授(2023~) 2012 KYOTO EXPERIMENT 砂連尾理/劇団ティクバ+循環プロジェクト『劇団ティクバ+循環プロジェクト』</p> <p><寺田 みさこ> 京都造形芸術大学 准教授(2007~2016) 2018 3人の振付家(マルセロ・エヴェリン/チョン・ヨンドウ/塚原悠也)によるソロ作品「3部作」 2012 KYOTO EXPERIMENT チョイ・カファイ「Notion: Dance Fiction」出演</p>
15 (2003)	内田 淳子	演劇	2004 関西現代演劇俳優賞 女優賞	<p>近年の主な出演</p> <p><映画> 2022 狩野比呂監督『その消失、』 2021 上田義彦監督『椿の庭』 <TV・ラジオ> 2020 NHK BSプレミアム「シリーズ・横溝正史短編集Ⅱ 犬神家の一族」 <舞台> 2022 杉原邦夫演出「血の婚礼」</p>
	上森 祥平	クラシック・チェロ	<p>2016 齋藤秀雄メモリアル基金賞 咲くやこの花賞 2012 京都府文化賞 奨励賞</p>	<p>京都市立芸術大学 准教授(202*~) 欧州各地で演奏活動の後、2005年ドイツ国家演奏家資格を取得。ベルリン藝術大学を卒業し、帰国</p>
	mitch	ジャズ・トランペット	2022 なにわジャズ大賞	<p>2025 音楽生活30周年を記念してアルバム「30/50」をリリース 30周年記念ライブを Billboard live Osaka で開催</p> <p>役者として映画・ドラマにも多数出演 2024 NHK連続テレビ小説「おむすび」 2023 NHK連続テレビ小説「フギウギ」 など</p>
14 (2002)	井上 隆平	クラシック・ヴァイオリン	2008 青山音楽賞	<p>2024 アマービレフィルハーモニー管弦楽団 コンサートマスター 2021 京都・大阪で「バッハ:無伴奏ヴァイオリン・ソナタ&パルティータ全曲演奏会」開催 神戸市室内管弦楽団 副首席奏者</p>
	ソバット・シアター(10名) 代表:中田 秀人	映像・美術造形	<p>2010 文化庁メディア芸術祭 アニメーション部門 優秀賞 毎日映画コンクール 大藤信郎賞 2009 『電信柱エレミの恋』でSKIPシティ国際Dシネマ映画祭 観客人気投票1位</p> <p><中田 秀人> 2014 尼崎市民芸術奨励賞 2003 五島記念文化賞 美術新人賞</p>	<p>中田の近年の活動に、 2021 自主製作アニメ『高野交差点』の原案・脚本 ※ 毎日映画コンクール アニメーション映画賞 京都国際マンガ・アニメ大賞 大賞</p>
	高橋 匡太	現代美術・インスタレーション	<p>2025 京都府文化賞 功労賞 2022 京都美術文化賞 2010 京都市芸術新人賞 2008 京都府文化賞 奨励賞 2005 五島記念文化賞 美術新人賞</p>	

13 (2001)	松岡 万希	クラシック・声楽	2015 兵庫県芸術奨励賞 2011 ABC新人コンサート音楽賞 2010 青山音楽賞 2009 飯塚新人音楽コンクール 声楽部門 第1位	現在も兵庫を中心に定期的に公演 2006 文化庁新進芸術家海外留学制度にてイタリアへ(2008年帰国)
	河原崎 貴光	メディアアート	N.A.	徳島大学 准教授(2007~) 京都造形芸術大学 助教授(2004~)
	奥村 泰彦	舞台美術	2009 読売演劇大賞 優秀スタッフ賞 2008 十三夜会 奨励賞 2006 読売演劇大賞 優秀スタッフ賞 2003 関西現代演劇俳優賞 男優賞	近年の主な舞台美術に 2023 ニッポン放送『燕のいる駅』(演出:土田英生) 文学座『昭和虞美人草』(演出:西川信廣) 2022 朗読劇『真白の恋』(演出:土田英生) などがある。
	坂本 公成	現代舞踊	2008 京都市芸術新人賞 2002 アジアン・カルチュラル・カウンシル(ACC) 助成	ダンスカンパニー Monochrome Circus 主宰 京都文化芸術都市創生審議会委員
	文楽若手義太夫節の会(2名) 竹本 千歳大夫、豊竹 呂勢大夫	浄瑠璃	<竹本 千歳大夫> 2024 紫綬褒章 2023 大阪府市民表彰 文化功労部門 2022 芸術選奨 文部科学大臣賞 2009 文化庁文化交流使 松尾芸能賞 優秀賞 <豊竹 呂勢大夫> 2024 松尾芸能賞 優秀賞 2019 芸術選奨 文部科学大臣賞 2013 日本伝統文化振興財団賞 2012 十三夜会 年間大賞	